

京都の谷口地形における庭園・園池の水源と水みちに関する研究

京都大学大学院工学研究科 学生員 ○藤原剛

京都大学大学院工学研究科 正会員 出村嘉史

京都大学大学院工学研究科 正会員 川崎雅史

京都大学大学院工学研究科 正会員 樋口忠彦

1. 目的

近年都市空間における水環境が果たす役割が注目され、水を媒介として都市の新しい地域づくりの場の再生が試みられると同時に、アメニティ空間としての水辺のデザインがなされている。しかし、その前提となる水の豊かさについては、京都では明治時代の琵琶湖疏水開発の恩恵は大きい、その広大さゆえにかつて京都を潤していた湧水に対する意識の低下が感じられる。本研究は、このような近代開発の影響を除いた本質的な水源・水みちの現状の把握と、湧水の豊富さを涵養する要因の追求を背景としている。

本研究は、京都において歴史性を有する庭園に着目し、特にかつては手近かに水が得られたと考えられる京都山辺の谷口に位置する庭園を対象とした。そしてその水源・水みちのディテールを把握し、その庭園の水の潤を左右する要因の一つとしての立地を把握することで、谷口に位置する庭園の立地と水源・水みちの現状との相関を分析することを目的とした。

2. 対象庭園の立地および水源・水みちの分析

本研究では、対象庭園の立地を1:2000スケールで微地形を把握した。さらに地名の由来の追跡、古地図・古絵図、ヒアリング調査や現地踏査をもとに、水源・水みちと水管理について過去から現在にわたる詳細な把握を行った（図1、次頁の図2）。

(1) 詩仙堂庭園

比叡山西南麓に展開する高台で、急傾斜扇状地の比較的山裾部に位置する庭園である。南東の谷壁斜面に隣接し、その斜面の谷底の比較的深い部分を水みちが通っている。庭園内には、洗蒙瀑や鹿おどしなどの敷地の段差を巧みに利用した演出がなされており、二カ所の取水口から水量を微妙に調節しつつ水を引き込んでいる。

(2) 清水寺成就院庭園

音羽山尾根部を東の音羽山の谷壁斜面および北の高台寺山の谷壁斜面に囲まれた囲繞性の強い空間であり、かなり高位の段丘面に位置する。なお南を轟川が流れている。かつては背後の谷壁斜面から湧水が滝石組に流れ込んでいたが、現在は轟川に取水口を設けてパイプで園池に水を引き込んでいる。

(3) 南禅院庭園

東山山麓の山裾で、谷壁斜面に三方を囲まれた囲繞性の強い段丘に位置し、北に隣接する急傾斜扇状地との段差も大きい。付近を疏水分流が流れている。かつては、背後の山の谷水を直接園池に引き込んでいた可能性が高いと考えられているが、現在は疏水をポンプアップして滝石組に流し込んでいる。

3. 分析に基づく考察

対象庭園の谷地形を微地形単位で着目すると、谷口との距離により、谷口に密接する〈谷口密着型〉と、谷の水口と庭園との間に少し距離を置く〈谷口近接型〉に分類することができると考えた。

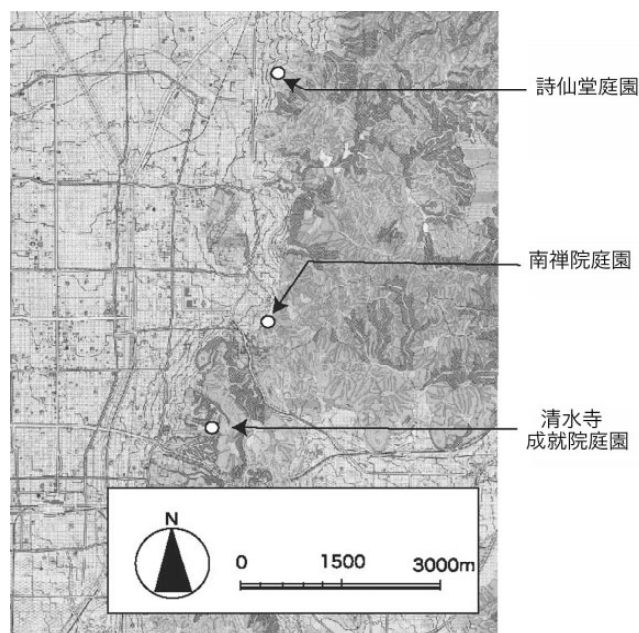


図1 対象庭園の位置（下絵は土地条件図）

キーワード 谷口、庭園、水源と水みち、立地

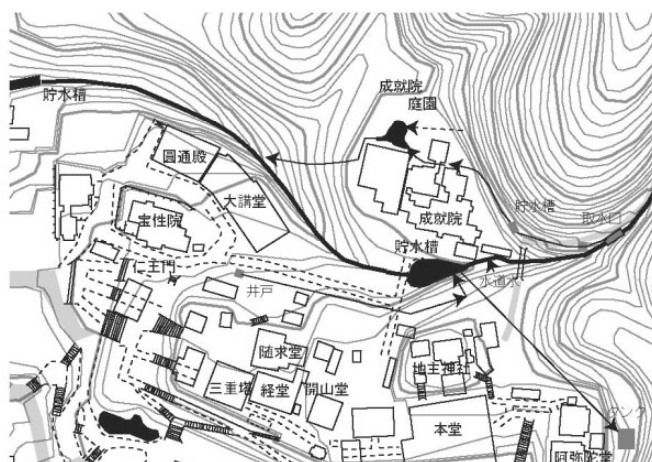
〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 TEL&FAX 075-753-5123



詩仙堂庭園の水源と水みちの様子



南禅院庭園の水源と水みちの様子



清水寺成就院庭園の水源と水みちの様子

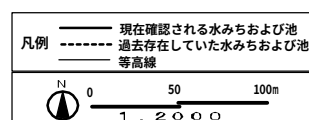


図2 対象庭園の水源と水みち（筆者作成）

＜谷口密着型＞では谷水を直接的に園池に注ぎ込み、園池は比較的少量の谷水に依存していたと考えられた。しかし南禅院庭園の例に見られるように、今日では少量の谷水が周辺環境の微妙な変化に敏感に反応し枯渇していた。＜谷口近接型＞では比較的豊富な水量を維持する水源から、比較距離を置いた位置で間接的に取水しており水源自体の水量変化に対して柔軟に対応できたと考えられた（図3）。

4. 結論

京都山辺の谷口地形に位置する庭園においては、谷口と園池との距離に応じて水の引き入れ方が異なっていた。さらに京都の地表面を流れる湧水について水量減少の傾向があると考えられ、水の引き入れ方に応じて、その枯渇傾向が園池に与える影響の度合いが異なることが明らかになった。

参考文献 樋口忠彦：日本の景観-ふるさとの原型-、ちくま学芸文庫、1993

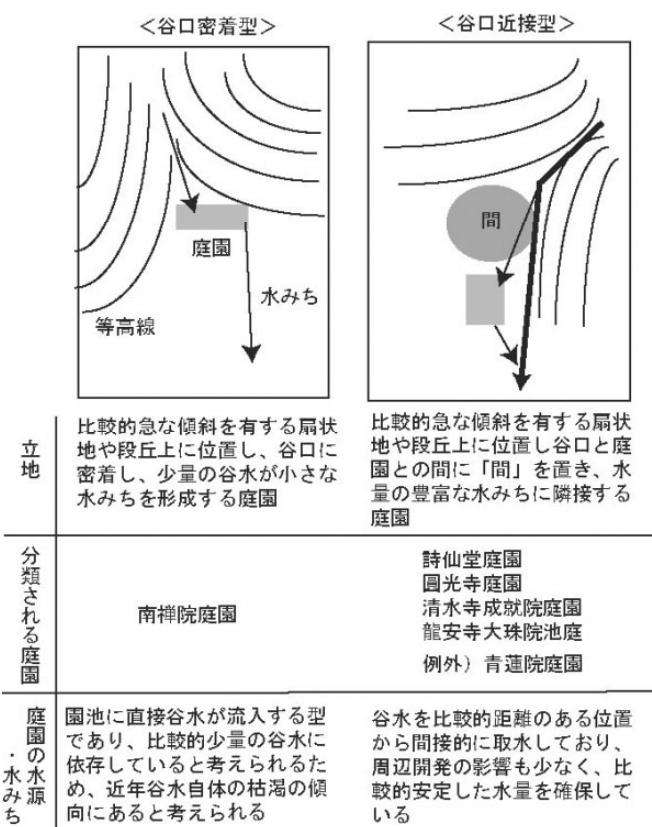


図3 谷口地形による庭園の分類